

「地域子ども」と生活文化の創造

——弘前ねぶたまつりににおける「じゃわめぐ」精神の価値——

岸 本 麻 依

1. 研究の背景

地域の安全性が保証されなくなった現代において、子どもがのびのび遊ぶ機会が減少し、それに伴う豊かな感動体験の阻害が問題視される。また、核家族やひとり親世帯の増加が地域での交流を失わせ、子どもの孤立にまで影響を広げている。現代社会における子どもの問題は多岐にわたり、学校教育や学校外教育の視点にとどまらず、福祉的な観点や文化としての学びを含めた総合的な子どもへのまなざしが求められている。今まさに直面している課題を根本からとらえるためには、子どもが実際に生活を営んでいる「地域」に焦点を当てアプローチしていく必要性が高まっている。

実際に自分の目で見て、自分の体で感じるという実体験としての感動経験することは、子どもの遊びや文化に関して「精神の集中・躍動・美的経験」（古田、1997）というワードやアニメーション（増山、1995）の概念が提起されその重要性がますます大きくなっていることから、現代の子どもにとって重要な意味をもつといえる。

筆者は古田や増山の概念を、生まれ育った青森県のネプタに体感的にみとめた。理論的な言及がされていないネプタの実態をひも解き、地域文化と子どもの発達の間を解明することに本研究の意義がある。「地域ネプタ」の精神を引き継ぐ存在として、地域の伝統や文化が血肉化された「地域子ども」というとらえ方を提案したい。とりわけ青森にはこのネプタには欠かせない「じゃわめぐ（血が騒ぐ、血がたぎる）」という方言があり、この地域固有の身体的感覚が文化を個人の内に内在化させ、地域住民の身体や独自の感覚をつくっているといえる。個人の内面に取り込み文化として身体化されたものを、地域の共通の思いや感覚として受け継いでいくことが祭りの重要な価値であると考えられる。

2. 研究のねらいと研究方法

本研究では地域を拠点とし地域で生活文化を展開する子ども（以下、「地域子ども」）の存在に光を当て、彼らが地域のなかで実際に見るもの、感じること、さらに地域での感動経験がもつ意味を、以下の方法で追究することを目的とした。

- ・文献調査…青森県弘前市に保管されている資料を主な分析対象とし、これまでに弘前の子どものかわってきた子ども会の動きに着目しながら「地域子ども」という概念について検討した。特に1960年代から80年代に活発化されてきた子ども会リーダー養成実践として描かれている「弘前方式」の実態を明らかにした。参考とした文献は主に弘前市立図書館と弘前市立中央公民館所蔵の書籍や資料である。
- ・現地調査…筆者は調査対象団体の一員となり人手として活動に参加しながら地域の実態調査を行った。ねぶた運行やその他の準備作業を経験するなかで、組織の動きや人々のかかわりを記録し、「地域子

ども」における教育的意義が見受けられた場面や、子どもの成長発達や生活文化にかかわる事例について分析した。その土地独自の風土やこれまで継承されてきたねぶたの歴史を今日の実践を通じて見出し、調査をした地域で生活する人の語りや様子を描き出すことによって生活文化を営む風景をとらえた。

3. 本論の展開と結論

第1章ではネブタの起源から現在の形式に至るまでの「地域における祭り」の位置づけを行った。「ネブタ祭り」の起源とその変遷過程を追い、かつてのネブタが子どもの目にどのように映っていたのか、そして過去から現在にわたってネブタが地域においてどのような役割を担ってきたのかを論じた。大人の激しいネブタをみるかつての子どもの様子を資料から読みとり、現代まで伝えられた地域に対する特別な思いについて考察を行った。時代とともに台頭してきた魅せる「観光ネブタ」が、それぞれの地域に以前までとは異なる祭りをもたらした。市民が創ってきた伝統的な祭りが質を変え観光資源としての役割を果たすようになったことで、改めて浮かび上がった伝統的な「地域ネブタ」の価値が見出された。子どもにとって「地域ネブタ」は多くの経験の場であり、伝統文化を継承していくという生活文化を創った、いわば「地域に生きる」ための土台としての機能をもっている。さらに町会の子どもが積極的にとりくんできた子ども会活動の衰退という現実と、それに代わる「地域ネブタ」がもつ意味を再検討する必要がある。ネブタに対する描き方やとらえ方は時代を経て変わってきているが、時代や世代を超えて地元の人々のなかに根付いたネブタに対する独自の精神性が存在するのこともまた事実である。地域が創りあげてきた祭り文化と、それが青森に根付き継承されてきた実態を認識することに価値がある。

第2章は地域の子どもが町会子ども会のなかで活躍し、地域を創っていく存在であった事実を周知することを目的とした。そのために子ども会連合会発足以前の活動の変遷や、発足以後の発展の軌跡をたどり、活動概要を全体的にとらえた。さらに、弘前子ども会の最大の特徴であった「弘前方式」の実態を読みとるべく、現在残っている弘前市の子ども会資料の整理を行った。数種類存在したリーダー研修会や子ども会を卒業した子どもが開いた座談会の内容を取り上げた。加えて、弘前市の「地域子ども」を見守り支援した大人の組織についても言及した。「地域に生きる」子どもが育っていくという文化に焦点を当て、「地域で育てる」ことと「地域に育てる」ことを考える要素として大きな役割をもつ大人の重要性に迫った。紹介した子どもや大人の組織から学び、以前のような「子ども会」が機能しなくなった現在の弘前の子どもについて検討を行った。かつての子ども会が担っていた役割は大きいですが、それが失われた現代においては子ども会の単位であった町会において子どもがねぶた活動を続けている団体の重要性が増している。過去一定期間整えられていた子ども会の「弘前方式」という制度だけではなく、現在子どもが地域でどのように活躍しているのか、その近代的課題に迫る必要がある。「地域子ども」が育っていく環境について子ども会組織から引きとるべき内容を検討し、今後の「地域子ども」に対する示唆を与えた。

第3章では子ども会活動が消滅した現在の弘前市において、「地域子ども」として生活する子どもの実態を示した。時代とともに「商品化」され、地域住民のための祭りというより観光としての色が濃くなっているなかでも、地域とのつながりを重視しねぶたを通して子どもにアプローチしている事例がある。資料としては残っていないが現在も地域と子どもをつなぐ活動に力を入れ、弘前の子どもとして育てていこうとするねぶたに関する実践を描いた。子ども会の育成に教師が深くかかわっていたという弘

優秀修士論文概要

前市の流れを踏まえても学校のとりくみへの注目が必要であるため、地域に積極的に目を向ける学校として弘前市船沢地区にある「弘前市立船沢中学校」の事例を分析した。また、学校の枠にはまらず自分の地域としての町会において活動している子どもを追うことでさらに考察を深めるため、子どもねぶたをメインとしてねぶたまつりに参加している「仲町子どもねぶた愛好会」の事例を分析した。地域とかわかることによって子どもが人間形成を遂げていく様子を考察し、今を生きる「地域子ども」への焦点化を図った。

終章は、本研究の総括として弘前市での実践事例から学んだ「地域子ども」の価値と、地域で生きていく子どもが育っていくことについてまとめた。筆者は学校や地域での観察を続けたが、学校に地域を取り入れることと、地域に子どもが関与していくことでは、子どもと大人のかかわり方や意識が異なる。そのような構図の評価の仕方、また子どもと大人の関係性が重要である。世代を超えて同じ場面・感情・興奮を共有するネブタは「地域子ども」を育てていく鍵となり、さらに青森の方言である「じゃわめぐ」というキーワードはその地域に住む人々の心や身体をつくり、文化が繋がれていく。また、そのような祭りが子どもの人間形成に及ぼす影響を検討した。地域に根付いた生活を営む子どもの人間形成にとっては、地域住民との人間関係が構築されること、体験の積み重ねから文化を自己のなかに取り込んでいくことが大きな要素である。地域特有の人間形成力が根付いていくことで独自の文化が紡がれていく。文化として子どもの生活のなかに祭りの要素が存在すること、さらに同様に大人の立場からもともに祭りを楽しむことが地域を創っていく。

本研究では青森の「じゃわめぐ」精神が、地域に生きる「地域子ども」の成長発達に影響を与える構図を見出し、伝統文化を継承していくという自然な生活文化の形成から、教育という枠組みではなく「生きる」「生活する」という観点を導き出した。ねぶたまつり体験における「じゃわめぐ」精神が「地域子ども」に与える影響を再考し、地域独自の文化を継承していくという生活文化は現代の子どもを考察するうえで意義深い。「地域子ども」というとらえ方が、これからの子ども研究への視座を深め、子どもの豊かな成長が実現する社会を心より待ち望んでいる。

主要参考文献

- 増山均・汐見稔幸・加藤理『ファンタジーとアニメーション：古田足日「子どもと文化」の継承と発展』童心社、2016年
- 佐藤一子・増山均『子どもの文化権と文化的参加—ファンタジー空間の創造—』第一書林、1995年
- 古田足日『子どもと文化』久山社、1997年
- 高橋勝『子どもの自己形成空間：教育哲学的アプローチ』川島書店、1992年
- 高橋平徳『『祭りの教育学』に向けて—『非日常』と『対面』の人間形成—』早稲田大学自己教育研究会編『自己教育へのまなざし』成文堂、2010年、99～107頁

主要参考資料

- 筆者が作成したフィールドノート
(弘前市立船沢中学校／仲町子どもねぶた愛好会)

中国におけるシュタイナー教育（華徳福教育）の現状と意義

—— 素質教育の「受け皿」から子どもの「発見」へ ——

華 嘉 祺

はじめに. なぜ、いま、シュタイナー教育なのか

0-1、問題意識と目的

2001年から、中国では子どものさまざまな素質や人間性を育てようとする「素質教育」（人の能力や個性を尊重する教育）が教育改革により推進されているが、現状としては、小・中学校ではまだまだ「応試教育」（進学率を高め、成績をあげることを目指す教育）が主流であり、改革の効果が出ていない。

一方では、直近10年間で華徳福（シュタイナー教育）という教育が早いスピードで中国の各地に立ち上げられている。当然「応試教育」の背景があったが、民間では一部の教育者が保護者との協働で新しい教育を模索し、シュタイナー教育を登場させた。学校の数としては、2012年まではシュタイナー教育の幼稚園は200箇所、小学校20箇所が設立されている。また、筆者は上海にあるシュタイナー学校の教師から尋ねてきた情報によると、2017年までにおよそ1000以上の数を超えている。

海外から輸入されたシュタイナー教育は、今までの中国における教育とかなり異なっており、きわめて人の個性を尊重し、自我形成を追求する新教育であるが、これまでの実績、また、素質教育との関連性がまだ明らかにされていない。

現状としては、中国におけるシュタイナー教育に関する研究では主に理念論にとどまっており、現場の実践を踏まえた研究は少ない。加えて、多くの学校はホームページすら存在していない。

以上の理由から、筆者は日本と欧米の文献を基づいて、中国における学校を訪問して調査を行えば、この研究が成立できると考えている。また、中国のシュタイナー教育に焦点を当てて、中国の教育現状に対する示唆を得ることが本研究の目的である。

1. 中国におけるシュタイナー教育の導入

1-1、中国における初めてのシュタイナー学校

2004年に設立された成都シュタイナー学校（成都華徳福学校）は初めてのドイツに承認され、海外に注目されたシュタイナー学校である。創始者は黄暁星、張俐という夫婦であり、学校をつくりたいと思っただききっかけは1994年に外国観光客の紹介から初めてシュタイナー教育を知るようになった。

13年経って、2017年4月28日に第七回アジアシュタイナー教員大会が成都シュタイナー学校で開催され、中国シュタイナー教育の画期的な一歩を踏み出した。

1-2、中国におけるシュタイナー教育の先駆け

ところが、中国シュタイナー教育は2004年から始まったのではない。2010年に「面对面」という番組

でエッカート・レーヴェという人が報道された。

彼は1999年に「シュタイナー教育友好会南寧事務所」を設立し、独自に貧困地域を回りながら、子どもたちに教育を受けさせていた。当時彼は「私の学生は、自分自身の新たな生き方を見つけさえすれば、彼たちの生活を変えられるのだ。」と発言した。

2003年、エッカートはこれまでの実践を取り上げ、「子どもたちの天性（生まれ持った才能）と協力する」という書籍を出版した。

黄曉星たちと全く違う道を歩いていたが、シュタイナー教育の先駆であるエッカートの実践も本研究には不可欠だと考えている。

2. シュタイナー教育の特徴

1919年に「自由ヴァルドルフ学校」が初めてのシュタイナー学校として設立された。校長と行政職種を設けらず、教師と保護者の共同運営は特徴である。

当時シュタイナーは人智学について、「私たちはこのヴァルドルフ学校で特定の世界観を教育しようなどとはまったく思っていません。ヴァルドルフ学校は特定の世界観による学校ではありませんから、人智学のドグマを子どもにおしつけることはしません。どんな人智学上の教義も教えようとは思いません。そもそも人智学は教育内容にはなりません。しかし私は人智学を教育の実際に役立たせようと努力するつもりです。」と述べていた。

言い換えれば、シュタイナー教育の本質は人智学を子どもに教える趣旨ではなく、確実に精神の独自性を保障する学校体制だと考えられる。

3. 中国におけるシュタイナー教育実践の展開と現状

3-1、エッカートの実践から見るシュタイナー教育の意義

シュタイナーは「Education As a Force for Social Change」には、当時の国家は教育において、どんどん文化の発展性を飲み込んでしまい、子どもを設定した教育目標に到達させ、予測できる形になっていくと強く批判した。

この論説を用いて、エッカートは中国の子どもたちの成長に阻害している要因を提示した。学校では教科書により基準が決められ、社会では学歴、資産、家庭が人の評価基準となり、やがて子どもは自由の精神が奪われ、自らの考えを表明することより、家族、学校、社会の基準に合わせる思考が生まれると指摘した。

シュタイナーの社会三層化理論によれば、社会は政治生活（Right Life）、経済生活（Economic Life）、文化生活（Cultural Life）という三つの生活領域がある。人の精神自由を守るため、三つの領域は同じ重要であり、それぞれの独自性が保障されるべき、それぞれの社会役割を分担している。

現代中国社会に問題点としては、まず前述したように社会が基準化され、階層化されることは一種の社会分裂だと考えられる。シュタイナー自身も1919年に社会における最も地位が低いと見られる労働者に講演を行い、精神の自由を強調し、「自由ヴァルドルフ学校」を設立した。

また、中国都市圏において、多くの学校が活動的な学習よりメディア設備を用いて教育を行っているため、子どもを物質的な環境から切り離させ、体と感覚器官の発達に影響を与えている。言い換えれば、環境と個人の分裂だと考えられる。

さらに、その影響を受けて子どもの感覚器官の発達が不健全になり、知的学習をひたすら行くと、本来すべきことをはっきりわかっているが、結局自分の感受と行動は違う方向に向かっていくとなり、体と意識を統一できなく、より一層の分裂が生じている。

社会、環境、個人、三種の分裂が教育と緊密に関わっていることがエッカートの実践を通して明らかに示されてきたと考えられる。

3-2、シュタイナー学校の現状

成都シュタイナー学校の実績を中国のシュタイナー教育の現状としてとらえることが充分ではないため、筆者は他のシュタイナー学校の運営状況に対しての考察を行い、上海におけるシュタイナー学校・福源学堂を訪問した。

学校自体がドイツのシュタイナー教育連盟に名乗られているが、実際では一般学校として運営する許可を取得していない。運営者によると、現状としては、学校の承認は未だに多くの中国シュタイナー学校が直面しなければならない難点である。

また、残念ながら、シュタイナー教育の理念を理解した上で、子どもをシュタイナー学校に通わせる親が今でも少ないと院長が語っていた。子どもを福源学堂に通わせた保護者は基本的に三種類である。一部の親は子どもを幼稚園からシュタイナー教育に通わせたので、シュタイナー教育の方法を納得し、引き続き子どもを小学部に進学させた。一部は最初から中国教育に不安を抱えており、新しい教育を探しているときにシュタイナー教育と出会った。残りの一部は自分の子どもが学校に対して嫌う気持ちを理解し、新しい教育を尋ね始め、シュタイナー学校に転校させた。

言い換えれば、これまでシュタイナー教育が中国で広がっていく根本的な要因は、シュタイナー教育を求めている保護者の増加ではなく、中国における主流教育に疑問を持つようになった保護者が増加しているからだと考えられる。

おわりに 中国におけるシュタイナー教育の可能性

既存の文化に縛られず、社会に参入し、社会を創造し直していく人に育てることがシュタイナー学校本来の理念である。したがって、この理念により、人の個性を尊重する意識を中国社会で芽生えさせ、子どもを改めて「発見」し、中国で画期的な教育意識の革命をもたらす可能性がある。しかしながら、中国のシュタイナー学校がまだ素質教育を求めている保護者の「受け皿」である現状は非常に残念なところである。

あくまで筆者の仮説であるが、シュタイナーの理念は的確に中国の社会から受け止められない限り、将来、素質教育の全面推進により、子どもが普通の学校に戻り、シュタイナー教育のブームが衰退されてしまう可能性が高い。

それに関わらず、シュタイナー学校が提唱した精神自由が一部の保護者たちの間に生き残り続けると考えている。

最後に、これから中国シュタイナー学校がより一層質を上げていくことと中国教育の全面改革に促進する力となることを展望する。

参考文献

- 子安美知子（1980）『ミュンヘンの中学生—シュタイナー学校の教室から』朝日新聞社
- 子安美知子（1993）『シュタイナー教育を考える』学陽書房
- 遠藤孝夫（2001）「シュタイナーの社会三層化運動と自由ヴァルドルフ学校の創設：人間認識に基づく教育と学校の自律性」弘前大学教育学部紀要. 85、2001、pp185-199
- 喜多明人（2015）『子どもの権利 次世代につなぐ』エイデル研究所
- ルドルフ・シュタイナー（1919）『教育の基礎としての一般人間学』高橋巖 訳（1989）筑摩書房
- ルドルフ・シュタイナー（1919）『教育術』坂野雄二・落合幸子 訳（1986）みすず書房
- ルドルフ・シュタイナー（1922）『子どもの教育』高橋巖 訳（2003）筑摩書房
- ルドルフ・シュタイナー（1924）『人間理解からの教育』西川隆範 訳（1996）筑摩文庫
- エッカート・レーヴェ（2003）『与孩子的天性合作——一位德国青年在中国的的教育梦』広東教育出版社